
祓い屋 ~exorcism of monster~

竜田 なつめ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祓い屋 (sexorcism of monster)

【Zコード】

Z6994P

【作者名】

竜田 なつめ。

【あらすじ】

憑依霊・ツキモノを器から清める祓い屋の一人が共に闘う遣い魔を得る。

祓い屋

そんなことをしながら、各地を放浪して半年、まあそれなりに板についてきたかと最近思い始めた。

といつても、町全体に被害を与えるようなでかい事件に出くわしたことないけどな・・・。

それでも、これまでに何度も同業者と協力したこともあった。

祓い屋とは何をするのかといつと、主に人や物にとり憑いた憑依^{ツキ}を清めることが仕事だが、場合によつてはそのツキモノと戦うこともある、しかし祓い屋は肉体や器、土地からツキモノを追い出し本体を清めるしかできない、故に退治となると神官や祝詞士^{のつと}、などの退治の専門家に任せるとかしない。当然そのツキモノは靈的な何かなわけで、この世に存在する普通の武器では通用しないやつかいな相手だ。

まあ、祓い屋もその靈的な何かに働きかけて清めてるのは確かだけど・・・専門家に言わせると、祓い屋の清めの靈力と、退魔の靈力は全くの別物なのだそうだ。

そんなわけで、俺たち祓い屋は、基本的にとり憑かれた生き物に対抗する最低限の武具しか身に着けていないため（最悪、器になつている生き物のことを殺すためだ）、ツキモノの退治にはなかなか迅速に対応できていないのが現状である。

そんな現状を打破しようと考えだされたのが、遣い魔である。

憑かれている器は、ツキモノに新たにとり憑かることは無く、ツキモノと反発するため、その器を俺達祓い屋がツキモノの意志のみを封印し、ツキモノの靈力を利用して打撃を与えることで、ツキモノを弱らせることができる。人によつては、憑かれている人と口

ンビを組んでツキモノ退治をするため、遣い魔といつ呼び名になつたんだ。

俺に遣い魔はまだない、そこまで緊急な事件にあつたことないし、だいたい危険そうなとき分かるし、そのときは遣い魔を持つての同業者が退治屋に同伴を依頼するからな・・・。

まあ、そんなふうに旅してゐる途中、町はずれの修道院までに手紙を届ける用事を頼まれた。街道からそんな離れた場所じゃなせうなので引き受けたんだが・・・。

First Story -修道院への手紙-

近くの町で祓い屋の仕事を終えると、依頼主の祖母から町はずれの修道院にいる孫へ、手紙を届けてくれと言われた。

最近、神官の祝福を頂いてないからちょうどいいと思いつき受けたが、修道院は森の中にある、行く途中に林道から外れたようで、迷ってしまった・・・。

方位磁石もなぜだか言つことを聞いてくれず、街道に出ることすら出来ない状況だった。

「どうか、もう少しきれいに道を補修してくれれば迷わなかつたのに・・・」

修道院へ行き来する人は少ないようで、獸道がひどく入り乱れていた。その中で一番使用頻度の多そうな道を選んできたが、いつの間にか道がなくなっていた。

「・・・方位磁石が利かないし、やっぱ戻つてみるかあ・・・」

そう思い、踵を返した時、今まで進んでた方向から突風が吹いてきた。

「ぶおおおおおーー！」

「・・・。」

それも、ただの風ではないようだ。風の吹いてきた方へ再び振り向き、神経を集中させる。

「・・・・・。若干、憑依靈の氣配がするが・・・。弱いな、修道院もあるし抑制が利いてるのか？いや、でもさつきの風は結構濃い靈力が・・・。」

少しその場に留まつて氣配を探つてみたが、強まる氣配も、移動する氣配も感じ取れないので、修道院へ報告するだけで十分と判断し、再び踵を返して来た道を戻ることにした。

つい癖で方位磁石をもう一回見ると、針は安定して正確な方位を指していた。

しばらくして、よつやく修道院に辿り着いた。町を出たのが遅めの昼食を食べてからだつたことと、道に迷つたため1時間半程かかつたようだ。修道院の建てられた場所はかなり広く、建物を正面にして左手には畠があり、右手では牛や羊を放牧しているようだつた。ちなみにこの入口から修道院の建物まで数？の道がまっすぐ伸びている。

その道を歩いていると、畠仕事をしていた修行僧の若い男が話しかけてきた。

「こんにちわ。アキシナ修道院へよぐぞおいでくださいました。旅の方とお見受けいたしますが、ご用は院長に？」

「ええ、とりあえずそのつもりです。」

修行僧の男は一礼すると、修道院へ駆けて行つた。
なかなかのスピードだ、この距離なのにもう見えなくなつてしまつた・・・。

修道院の中に入ると院長と思しき神官と傍らにシスターが控え

ていた。

「よつゝんや、旅のお方よ。・・・祓い屋の方ですか？」

さすが院長、神官なだけあって、靈力を感じ取つたそつだ。

「はじめまして、確かに祓い屋の者ですが、本日は別の要件できました。こちらで修行中のライヤさんの祖母から手紙を受け取つてきました。」

「これは、ありがとうございます。シスター・アメルダ、手紙を受け取りライヤの私室へ届けてください。」

シスターは静かに返事をして、音もなく歩み寄つてきた。手紙を渡すと一礼して、右奥の方へ姿を消した。

それを見送つたあと、例のツキモノの気配について報告することにした。

「それと、もうひとつお伝えすることがあります。神官様、この森にかなり弱いですがツキモノがいるそうですので、修行僧達にも警戒するようになど。」

「ほう、この森のツキモノに気付かれたとなると、なかなか感覚が研ぎ澄まされているようですね。」

「え？」

「半年前に訪れた祓い屋の方にも言われたのです。かなり弱いので、修道院にすら近づくことができないようで、被害が出ることはないだろうと言われましたよ。実際、何も被害はありませんし、最近の來た祓い屋の方に尋ねても問題ないそうでしたので、いなくなつたのだと思っておりました。」

「そうですか・・・しかし、私が感づいた奴は、一瞬だけ靈力を解放したように力が大きくなつたので、それで気付いたのです。なの

で、まったく危険がないとは言い切れないようです。半年前とは別の奴なのか、それとも同じ奴が力を付けたのか分かりませんが。

「・・・・。なるほど、分かりました、私も気に掛けておきますが、修行に影響が出るといけないので、院生達には伝えないでおきます。半年前の時に、敷地外への外出は控えるように言つてあるので、それで問題ないでしょう。」

「そうですか・・・。

『できれば、すぐに動いてほしいんだが・・・。数日、様子を見るか。』

そうですね。分かりました、一応心配なので、数日厄介になつてもよろしいですか？神氣の祝福も最近受けてないので、お願ひしたいのですが。』

「もちろんです。シスター・アメルダがそろそろ戻つてくるのだろうと思つので、お部屋を・・・。」

「院長さんー、ネーラただいま戻りました。」

ネーラという少女が修道院に入つてくるなりバケットを院長へ差出した。薬草が上にかけられている布巾からはみ出していたため、薬草採取から帰つてきたのだろう。

院長はお礼を言い、バケットを受け取り、彼女を紹介してくれた。

「この子はネーラです、町で孤児になつたところを修道院で引き受けたのです。」

「ここにちは、ネーラです。」

「ここにちは、よろしく。ネーラ。」

「優秀な子でいろいろと、手伝ってくれるんですよ。」

ネーラは小柄な少女で、身長は祓い屋の胸下（みぞおち程度）ま

でだった。

「院長さん、この方ははどうなります？」

「っこ先ほど来た祓い屋の方ですよ。数日泊まる」とになつたので、空いているお部屋へ案内してあげなさい。」

「うん。えっと、こちらです。」

「ありがと。それでは、神官様、少しの間お世話になります。」「いえいえ、お気になさらず。祈祷の時間は朝と夜の食事の前です。どうぞ、ご参列ください。」

「はー。」

院長に一礼し、廊下に続いて左奥の廊下へ向かった。

「ハライヤの方がお泊りになられるのはめずらしくですね、なんのよひじで来たんですか？」

若干舌足らずなの、真面目そうな少女だと印象を受ける。歩幅も少女の方が短いのに、歩く速さもあわせてくれているようで丁度良かつた。

「手紙を届けに来たんだよ、後は礼拝のためだね。」

「そうですか、誰へのテガミですか？」

「ライヤさんって人。知ってるかな？」

「ライヤさんなら知つてます。とても仲良しのおねえさんで、いつもおせわになつてるんですよ。」

少し嬉しそうなネーラを見ると本当に仲が良いんだな感じた。

「こま、ライヤさんは屋上でおせんたくしていました。帰つて来たときこに見えたんですね。」

「そうか。」

「ライヤさんもオハライの靈力を使えるんですよ。あまり得意じゃ
ないって言つてますけど、私は上手だと思います。」

「・・・・・。」

『森のツキモノのことについて話を聞いてみるか・・・。たぶん、
半年前からのことで何か気付いてるだろ?・・・。』

お部屋に案内してもらつた後で、屋上に行つてみよつか?』

「はいっ。この、一番奥が旅人の宿部屋になつてます。シスター長
が毎日掃除してるのできれいですよ。」

「そつか。」

『さつきの院長に仕えていたシスターかな・・・?』

ネーラに扉を開けてもらい、中に入ると確かに掃除は行き届いて
いるようだつた。軽く部屋を見渡し、適当なベットの足元に荷物を
置いた。

「ああ、屋上へ行こつか。」

扉の脇に立つ少女から、元気な返事が聞こえた。

修道院の屋上では、2人の女の修道女が洗濯物を回収し終えたと
ころだつた。

「ありがとう、ミラ助かつた。」

「つうん、気にしないで。だつて、最近疲れてるでしょ?ライヤも

勉強熱心だねえ、そういうところ尊敬しかねやつな～。

「あはは・・・。」

一人はライヤで、もう一人は彼女の友人のミラである。

一人はほぼ同時にこの修道院来て、それからの友達だつた。ミラは今日の夕食の支度まで特に仕事は与えられていなかつたため、午後からライヤの手伝いをしていたのだ。

一人は、太陽の香りのする洗濯物の入つた籠を一つづつ持ち上げた。

「あれ？ ネーラちゃんなんだよ。」

ミラが屋上にやつてきたネーラに気付き、ライヤも駆けてくるネーラを認めるといつ人は籠を下した。ネーラはライヤに抱きつき、「ただいまです。」と微笑んだ。

そんな二人のことを、姉妹のようだと思いながら祓い屋が片手をあげ挨拶しながら歩み寄ってきた。

「どうも、こんにちは。」

ライヤとネーラは話し始めてしまつたので、ミラが祓い屋の挨拶に返事をした。

「こちにちは、よつこそアキシナ修道院へ。もう院長にはお会いになられましたか？」

「はい。いまは、ネーラに案内してもらつてゐるところです。屋上に知り合いの修道の方方がいらっしゃると。」

「なるほど。」

同じよつなことを、ライヤ達も話していたらしく、ライヤがネー

ラを抱えたまま挨拶した。

「「んにちは、祓い屋の方なんですか。」

「ええ、町で仕事を終えたところで、ライヤさん宛ての手紙を預かつたので。」

「あ、祖母ですか？」

「そうです。少し急ぎだったようですし、引き受けました。」「すいません、ありがとうございます。」

ライヤはお礼を述べながら深くお辞儀した。すると、ミラが籠を持ってライヤを促した。

「じゃあ、早く仕事片付けちゃお。」

「あ、うん。」

「ネーラも手伝っていいですか？」

籠は全部で4つあり、3人では往復の必要がある。なので、祓い屋もライヤにツキモノについて、訪ねたかったので、手伝いを申し出た。

「じゃ、奥の2つは俺で持ちますよ。籠も小さいの持てるか。ネーラは一人を手伝つてあげて。」

そう言つて、籠の1つ抱きあげ、もう1つを抱え上げた。

「わあ、ありがとうございます。」

「いや、ミラ・・・。関心してる場合じゃないしょ。お客様に手伝わせてどうするの？あの、いですよ、どうひらいても、往復する予定だったので。」

「いえいえ、これくらいなら大丈夫ですよ。」

「小さい方はネーラが持ちますよ。」

脇に抱えている方の籠を指している。実際、この籠の大きさは2人分くらいの大きさで楽に運べるので、ネーラでも持てそうだった。

「分かった、じゃあお願ひするよ。」「はい。」

ネーラは持ち慣れた様子で籠を受け取り、小さな掛け声とともに籠を担ぎ上げた。

「つと、できました。」「わわ、重くないの？大丈夫？」

ミラが心配するが、本人の方は全然平気そうだ。

「想像以上にパワフルな子だ・・・。」「そうなんですよ。運動神経もいいし。いつも、すごく助かってます。・・・でも、無理しないでね。」「はいっ。」

ネーラの返事を受けて4人は階下へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6994p/>

祓い屋 ~exorcism of monster~

2010年12月31日08時19分発行